

ふ く い じ ょ う あ と
福 井 城 跡
や ま ざ と ぐ ち ご も ん
山 里 口 御 門

現 地 説 明 会 資 料

平 成 25 年 7 月 27 日 (土)

福 井 県 教 育 庁 埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

福井城跡山里口御門（A区）

調査の概要

山里口御門は、本丸への入口の門として創建当時（1606年）から造られ、方向の異なる二つの門によって枳形が形成されています。

今回、本丸側に構築された門の南半にあたる範囲を調査しました。

調査の結果、現代の攪乱が深くまで及び、門が構築された当時の面は大半が遺存していない状況でした。断片的ですが、石垣の裾部を中心に、門の基礎に関連する遺構を検出しました。

遺構

門跡南北の石垣面で細長い柱受けを4箇所検出しました。柱受けは、高さ約3.0mで幅0.3m程を測り、柱受けの間を底部中央で計測すると、東西約4.6m×南北約3.6mの規模となります。柱受けの底面から約2.4m上位に段があり、段には梁材などが南北に架構されていたと推察されます。

柱受け1・2の底部には、小形長方形の柄孔（ほぞあな）が彫り込まれており、柱受け1に隣接して板石を検出しました。柱受け3・4の底部では礎石を検出しました。長さ約0.3mで正方形を呈する石材を据え、中央に約6cm角の柄孔があげられています。

柱受け3・4の礎石下位で石製の暗渠（あんきょ）1の部材を検出しました。蓋石は遺存しませんが、幅0.3m弱で断面はコの字状を呈します。暗渠1が接する南北の石垣面には、東方の本丸側から西方の内堀側へ傾斜するように帯状の凹みが削り込まれていました。暗渠2は、調査区東端で暗渠1より下位で検出しました。幅約0.6mとやや大形で蓋石も遺存し、長方形の板石を断面がコの字状に組んで構築されています。

石列1は、板石をL字状に組んでおり、性格は不詳ですが暗渠2の続きとも考えられます。また、石列2は、径10～20cm大の礫をやや不整ですが列状に並べて構築されています。

遺物

近世から近代の土器と陶磁器や瓦などの細片が、コンテナバット1箱弱と僅かに出土しました。

まとめ

遺存状況はあまり良好ではありませんでしたが、石垣の裾部を中心に柱受け底部の柄孔や礎石など門の基礎に関連する遺構を検出しました。また、柱受け間の幅や上位段までの高さなどから、門の規模を推定する資料が得られました。引き続き北側に隣接する範囲を調査し、さらに山里口御門の復元に向けた資料を収集していきます。



図1 調査区位置図

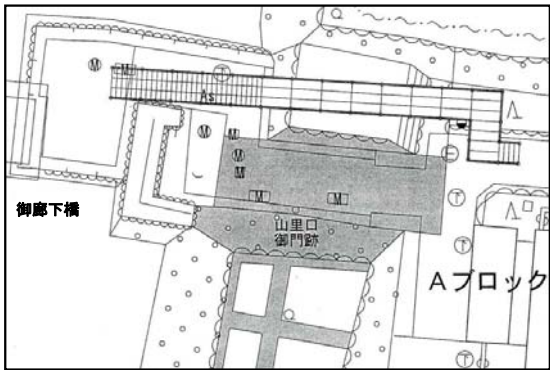


図2 調査範囲図

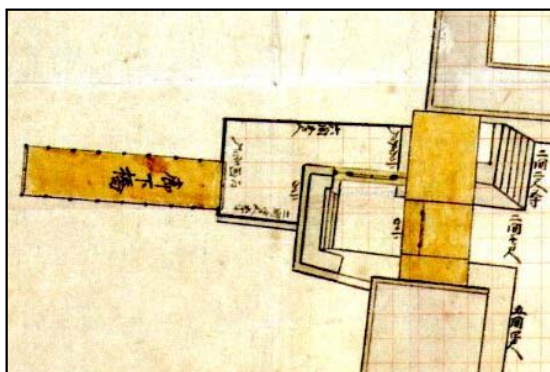


図3 「福井城本丸御建物図」『松平文庫』

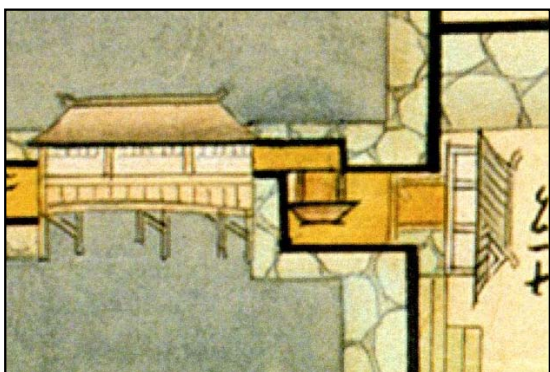


図4 「御城下之図」正徳4年(1714)

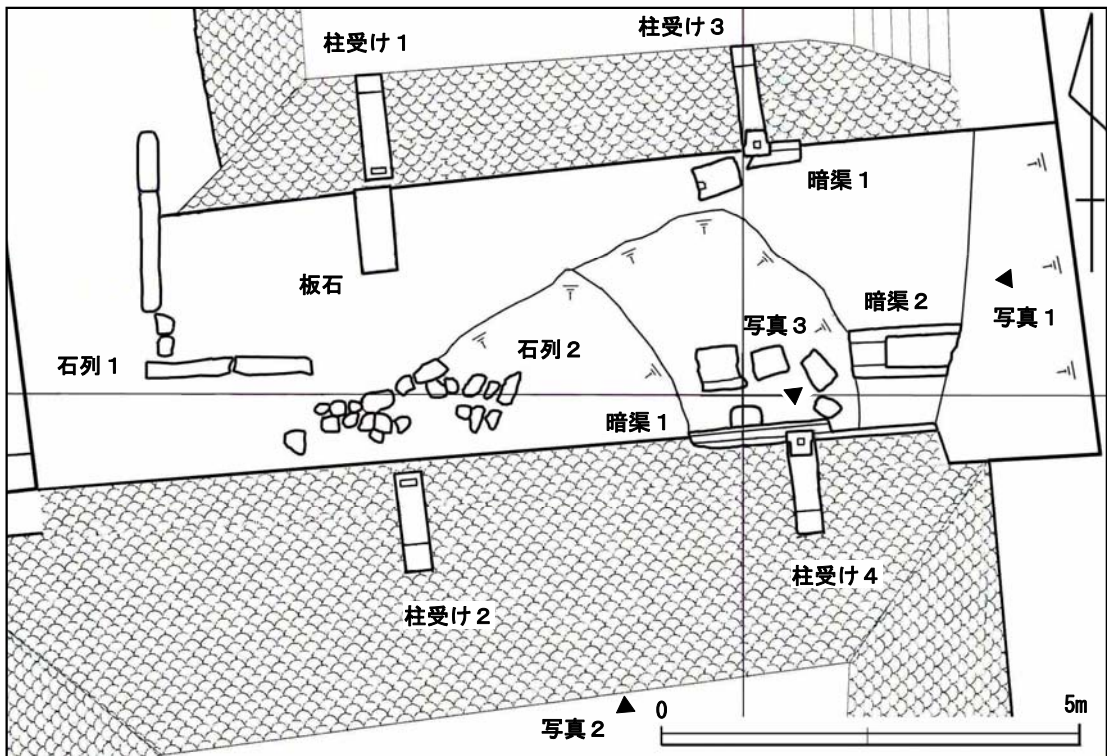


図5 調査区平面略図(縮尺1/80)

福井城跡山里口御門



写真1
調査区全景（東より）



写真2
柱受け1・3（南より）



写真3
礎石と暗渠1（北より）

【城門參考資料】



龍野城（埋門）



二条城（北中仕切門）